

# 霞

—2018年度秋季展示室だより—

土浦市立博物館

平成30年10月2日発行(通巻第44号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころを紹介するものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(44)

古写真「川口川<sup>こうぐちがわ</sup>閘門周辺」



大正7(1918)年頃の川口川閘門から川口川上流をみたところ

です。手前の四隅を竹で張り上げた方形の網は<sup>よてあみ</sup>四手網といい、水底に沈めて置き、時々引上げて中に入った魚を捕りました。中央の三階建ては旅館「土浦館」で、戦時中は「土浦学寮」となり、東京からの集団疎開児童を受け入れました。前方左手の八千代橋は、疎開児童が親と面会後別れる場となり、涙橋とも呼ばれたそうです。

【情報ライブラリー検索キーワード「土浦港」と「川口川」】

## 目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(44)・・・1
- 博物館からのお知らせ・・・1
- 【館長講座、特別公開、テーマ展他】
- 手のひらにのる彩(古代)・・・2
- 算額(近世)・・・3
- 将軍からの贈り物(近世)・・・4
- 土浦海軍航空隊の絵葉書(近代)・・・5
- 市史編さんだより・・・6
- 地域と博物館・・・7
- 霞短信「若き茶人に期すること」・・・8
- コラム(44)・・・8
- 情報ライブラリー更新状況・・・8

## 博物館からのお知らせ

★★茂木雅博の館長講座★★ 会場：博物館視聴覚ホール

10月28日(日)・11月18日(日)・12月16日(日) 午後2時～(1時間30分程度)

テーマ：「常陸の古代集落の調査」(11/18)・「常陸の貝塚の調査」(12/16)

※10月28日(日)は史跡めぐりです(詳細はお問い合わせください)。

★★特別公開「土屋家の刀剣—国宝・重要文化財の公開—」★★

9月20日(木)～10月8日(月)まで 土浦藩土屋家に伝わった刀剣の名品を紹介します。

★★テーマ展「井戸のある暮らし—人々の生活をうるおす」★★ 10月16日(火)～12月2日(日)

○展示解説会 10月27日(土)・11月11日(日) 午後2時～3時

○記念講演会「沼尻墨僊『<sup>さくせいず</sup>鑿井図』と江戸の<sup>ほりぬき</sup>掘抜井戸」11月24日(土) 午後1時30分～3時

講師：能城秀喜さん(袖ヶ浦市平岡公民館) 会場：視聴覚ホール 定員：70名(整理券配布は当日午前9時～)

○土浦城ウォッチング—水戸街道と善応寺の照井—

10月27日(土) 午前9時～12時 小雨決行 定員：25名(10月10日から受付開始 先着順)

○「お茶を一服いかがですか—水に想いをよせて」11月3日(土) 午後0時30分～3時

定員：100名(先着順) 茶券：200円(10月16日から博物館受付で販売)

★無料開館★ 11月3日(土)文化の日、11月13日(火)県民の日

★今年度の秋季展示は10月2日(火)～12月27日(木)です。

※季節展示の最終週には、一部資料の入れ替えがあります。



博物館マスコット  
亀城かめくん

※お知らせ欄の行事・日程は、一部変更となる場合があります。

いろいろ  
手のひらにのる 彩  
— 三彩陶器の小壺 —

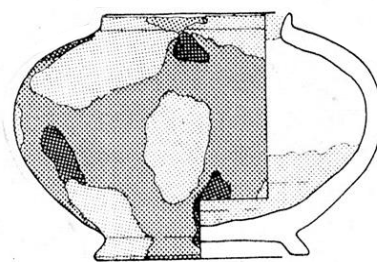
古代の人々が使用した器は褐色の土師器や灰色の須恵器が一般的です。いずれも素焼きの土器で日常雑器といえるものです。これらの土器に対して、わずかですが市内の田村沖宿遺跡群（おおつ野）では複数の釉薬をかけた施釉陶器が出土しています。その中のひとつに三彩陶器があります。

三彩陶器は緑釉と白（透明）釉、そして褐釉による三色が配された陶器です。国内で出土している三彩陶器の大半は、奈良時代（8世紀）に国内で生産された奈良三彩と呼ばれるもので、わずかながら唐代の中国から日本にもたらされた唐三彩があります。奈良三彩は唐三彩を模倣し、国内初の本格的な施釉陶器として誕生したもので、複数の釉薬が織りなす配色の美は当時の人々を魅了しました。出土品の発見状況から平城京があった奈良盆地でつくられ、各地に流通したと考えられます。唐三彩を意識した陶器とはいえ、軟質なものが多く在来の土器製作技術の伝統が活かされました。また、器種は唐三彩を写したものはなく、当時国内で用いられた金属製の仏教用具とのかかわりが強いとされます。天皇や貴族を中心に浸透していった仏教儀礼にふさわしい、日本的な高級陶器として生産された様子がうかがえます。

さて、田村沖宿遺跡群で出土した三彩陶器ですが、いずれも奈良三彩で、石橋北遺跡の掘立柱建物跡から2点、金澤遺跡の竪穴住居跡から1点出土しています。いずれも小壺と呼ばれる器種で、ちょうど手のひらにのる程度の大きさです。東国で出土している奈良三彩は、この小壺が一番多い器種といわれます。この小壺は薬壺とも呼ばれ、仏像の薬師如来が手のひらにのせる薬の入った小さい壺でもあり、仏教とのかかわりの強さがわかります。石橋北遺跡出土品は、破片ながら釉薬が良好に残り、濃い緑地に赤褐色釉が点々と施され、小壺の施釉方法の原則を知ることができます。また、金澤遺跡出土品は釉薬が剥がれ落ちていますが、釉薬の発色を考慮した白色を基調とする素地で、胴が張る小壺独特の器形が理解できます。茨城県内では三彩陶器の出土はわずかで、破片であってもその存在は重要な意味を持っています。（関口満）



三彩陶器の小壺（上：石橋北遺跡 下：金澤遺跡）



■ 褐釉 ■ 緑釉 ■ 白（透明）釉

（参考）三彩陶器の小壺

（財）千葉県文化財センター『八千代市権現後遺跡・北海道遺跡・井戸向遺跡』1994を改変して転載。

11/17（土）11時・14時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも古代コーナーに展示）

- 二彩陶器（当館所蔵）
- 緑釉陶器（当館所蔵）
- 土師器と須恵器（当館所蔵）





算額

—寺社こそ最高の見せ場—

寛政頃（1789～1800）のことです。参拝客でにぎわう浅草の浅草寺本堂に一枚の算額が掲げられようとしていました。町娘のあきは、書かれた問題と解答を見て首をかしげ、「まちがっているようなんだけど」とつぶやいてしまいました。算額を奉納しようとした武士の子、三之助は、間違いを言えと大勢の見物客の前であきに迫りました。あきが自分の答えを話すと、三之助は間違いに気づき、供の者に算額を掲げるなど言い残して人混みにまぎれて去って行きました。歴史小説『算法少女』（遠藤寛子著 筑摩書房）はこんな小気味のよい場面から始まります。

算額とは和算の絵馬で、額に問題と解答を書いて寺社に奉納します。あきは「算法の勉強をしている人が、観音さまのおかげで、こんなむずかしい問題がとれるようになりましたって、お礼の意味で、じぶんのかんがえた問題を、観音さまにみていただくのよ」と説明しています。参拝客の目に触れれば、和算の名人として名が知れわたります。

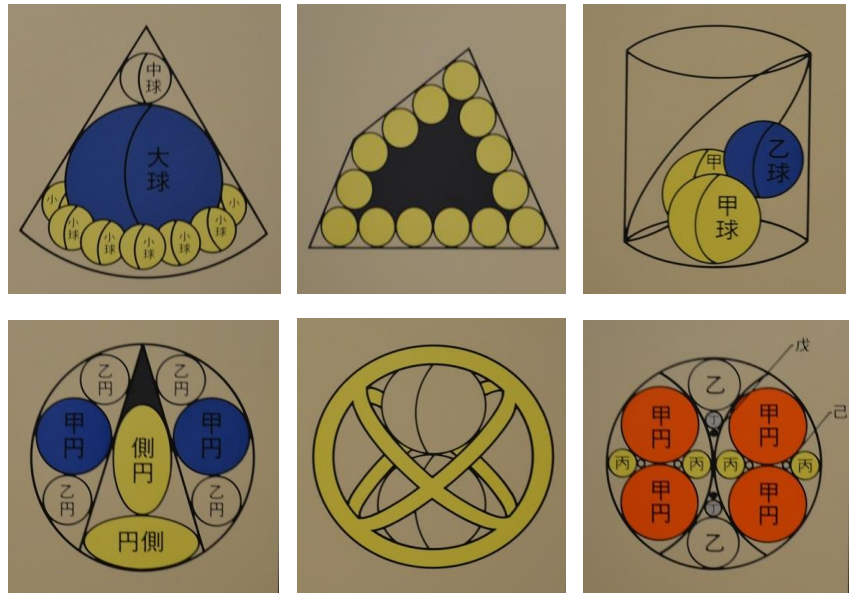
土浦でも天保15（1844）年8月、中城町の不動院（土浦市中央一丁目）に算額が奉納されました。不動院の本尊は船玉不動明王で、水運が栄えた土浦で信仰を集め、毎月28日の縁日には市がたつにぎわいでした。

長年掲げられていたため、表面の文字は現在ほとんど見えませんが、幾何の問題6問、答えと解き方が記されています。いずれも、図形がたがいに接している場合の直径や面積を求めさせる問題で、複雑な計算が必要です。

奉納したのは、矢作村（土浦市）の矢口善左衛門琴重（1794～1854）の弟子6名で、宍塚・永井・常名（土浦市）、古来・上の室・松塚（つくば市）の住人でした。琴重の和算の師匠は、水原（新潟県阿賀野市）出身の山口和（？～1850）です。和は文化14（1817）年から文政11（1828）年まで関東や東北を旅しながら和算を教えました（『茨城の算額』松崎利雄著 筑波書林）。

琴重らは算額の清書を書の名手である沼尻墨僊（1775～1856）に依頼しました。墨僊の塾「天章堂」は不動院の近くです。参拝客にまじって、塾生らも算額を見上げたことでしょう。

（木塚久仁子）



「算額」問題のイラスト

（当館寄託 現物は瀧泉寺所蔵 市指定文化財）

12/1（土）11時・14時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも近世コーナーに展示）

- 大輿地球儀（複製 当館所蔵）
- 渾天儀（個人所蔵 市指定文化財）



# 将軍からの贈り物

## —「土浦藩士書留」と刀—

博物館では、江戸時代の土浦を長きにわたり治めた大名土屋家の資料を展示しています。中でも特徴的な資料として、84口の刀剣があります。これらは、土屋家の当主が独自に収集したものばかりではありません。その多くが将軍や各地の大名から贈られたものです。今回はそのことがわかる史料を紹介します。

写真は「土浦藩士書留」と呼ばれる史料です。ここには虫干しに関する留め書きもあり、刀剣のほか、茶道具、絵画、書、歴代藩主の遺品、領地目録などが記載されています。これらは東櫓に納められていました。領地目録は、土屋家が治めることを許された領地が書かれ、大名にとっては最も大切な文書です。東櫓には土屋家にとって特に貴重なものが収められていたと考えられます。

さて、この史料に掲載されたもののうち、今回は刀剣の記述に焦点を当てます。「土浦藩士書留」には刀剣が6口記載されています。このうち5口が江戸幕府5代将軍徳川綱吉、6代将軍家宣から拝領したと記されています。これは、土浦藩を土屋家二代藩主政直が治めた時期と重なります。

具体的に見て行きましょう。「来國光御刀」(土屋家刀剣6に該当)の記述を見ると、「正徳元卯年十一月廿一日朝鮮人來朝御用被遊御勤候節相模守様御拝領」と添え書きがされています。正徳元(1711)年の「相模守」とは政直のことです。つまり、政直が朝鮮通信使來聘の際に尽力したことに対し、将軍家宣から褒美として刀が下賜されたことが記されています。

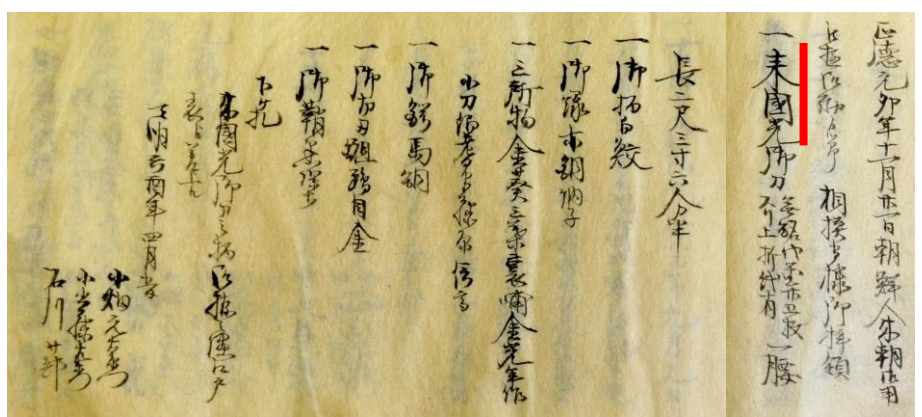
刀と拵についても詳細に記述されています。刀身は銘や折紙の有無、代金、寸法などの情報、拵は柄や三所物(小柄・筭・目貫)、鐔、鞘などの材質やデザインの情報が記されています。将軍から拝領した大切な品であるからこそ、紛失や取り違いを避けるため、一口一口の細かな特徴を書き記したのでしょう。

作者やその作成年代は、刀の作風や銘文からわかることがあります。しかし、刀そのものからわかる情報は限られています。そのため、古文書などの史料にも目を向けることにより、一口の刀に込められた歴史的背景にも目を向けることができるのです。

(西口正隆)

No.	種別	記載銘	贈り主	備考
4	刀	備前守家御刀	徳川綱吉	土屋家和田倉門邸に綱吉御成りの際政直拝領
11	刀	左弘行無銘摺上	徳川綱吉	家綱十七回忌法事奉行につき政直拝領
63	刀	延寿御刀	徳川家宣	綱吉三回忌法事総奉行につき政直拝領
6	刀	来國光御刀無銘	徳川家宣	朝鮮來聘使諸事総管につき政直拝領
	刀	則重無銘摺上	徳川綱吉	土屋家和田倉門邸に綱吉御成りの際政直三男定直拝領
59	太刀	大原真守銘有	—	江戸表よりご持参

番号は土屋家刀剣一覧の資料番号。



「土浦藩士書留」のうち「来國光」の部分(当館所蔵) ※傍線部は筆者

10/6(土) 11時・14時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(展示室1、2に展示)

- 刀 無銘(来國光) 9月20日(木)~10月8日(月)
- 刀 「兼定」 10月11日(木)~11月11日(日)





# 土浦海軍航空隊の絵葉書

## —予科練生の訓練風景—

昭和 14(1939)年3月、横須賀海軍航空隊の「海軍飛行予科練習部」が霞ヶ浦海軍航空隊の水上班(現在の阿見町・陸上自衛隊武器学校)へと移り、翌年11月、独立して誕生したのが「土浦海軍航空隊」です。「予科練」と通称され、14歳半から17歳までの少年が全国から選抜され、搭乗員としての基礎訓練がなされました。

写真①は、予科練生の訓練風景の着色写真絵葉書です。絵葉書と「海鷲ノ揺籃 土浦海軍航空隊 絵葉書集」と題された絵葉書袋(写真②)には「昭和十七年十月九日許可済」とあり、土浦海軍航空隊設置の2年後に許可を得て制作されたものとわかります。絵葉書は、体操・平行棒・剣道・柔道・銃剣術・籠球(※バスケットボールのこと)・ラ式蹴球(※ラグビーのこと)・飛込・短艇訓練(出発)・帆走訓練・飛沫ヲ揚ゲテ(適性飛行)・通信術の12枚があり、生き生きと訓練に取り組む練習生が被写体となっています。

袋と絵葉書には書き込みがあります。袋の表には「予科練魂 一、絶対服従 一、攻撃精神 一、犠牲的精神 一、頑張りノ精神」と「空ハ君等ヲ待ツ 来レ精神訓練道場 高橋練習生へ」という為書が、裏には分隊長の訓話が記され、さらに絵葉書の宛名面には、土空予科練魂と予科練節とが記されています。練習生への入隊記念品であったと思われます。

絵葉書を戸張礼記さん(昭和19年6月甲種14期生(2次)入隊)に見ていただきました。カッター(短艇)訓練が權から垂れてくる雫が凍るほど寒いなか行われたこと、通信の授業で「手首で打て！」と言われ緊張してうまく打てず殴られたことなど、写真は厳しい訓練を次々と想起させるものでした。しかし、絵葉書自体は「当時見たことはない。酒保で手に入ったのかもしれない」といいます。酒保は日用品やお菓子がある売店で、夕食後に「酒保開け」となると、券と引換えて饅頭などを食べることができたようです。しかし戸張さんの頃はそんなゆとりはなかったそうです。絵葉書がいつ頃まで作られたかは不明ですが、全国から集まった予科練生が故郷への便りや土産品として利用していた可能性があります。

昭和16年12月8日に太平洋戦争がはじまりました。予科練生は約1~2年の基礎訓練の後、卒業して飛行練習生教程(飛練教程)に進み、飛行練習航空隊で猛烈に厳しい飛行訓練を終えると、第一線の任務についていましたが、戦争末期になると訓練期間は短くなり、なかには未習熟のままに戦地に行き、戦死された方もいました。明るい雰囲気のある絵葉書は、予科練の広報的な役割も持っていたのでしょう。しかし実際の訓練とその後の運命は壮絶なものでした。

(野田礼子)

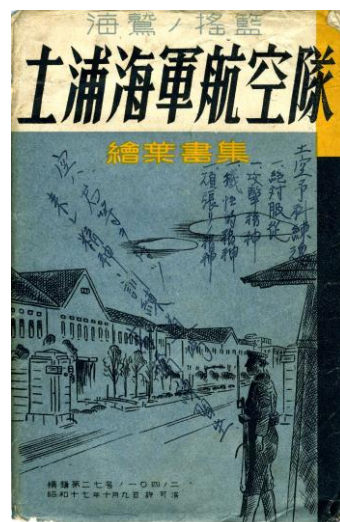
短艇訓練(出発)



土浦海軍航空隊

昭和十七年十月九日許可済

①絵葉書「短艇訓練」(当館所蔵)



②絵葉書袋(表面)(当館所蔵)

11/10(土) 11時・14時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも近代コーナーに展示)

●飛行練習生写真(当館所蔵)



# 市史編さんだより

## 中世史料調査での思い出話（その1）

歴史は社会科学の一分野ですから、実証と論理を重んじます。実証に必要なのが史料で、史料から歴史的真相を引き出す。その方法は論理的でなければなりません。私が土浦市史の編さん事業に参加して間もなくの頃、史料の扱いで忘れられない事例があります。

それは『大日本史料』を調べている時でした。この史料集は、国家的事業として編さんされた『日本書紀』を初めとする六国史に続くものとして始まり、東京大学に史料編纂所が置かれてからはその事業となりました。明治から現在まで継続発刊する編年体の史書で、年月日順に事件の要綱と史料を掲げるといふ体裁をとります。その第九編之六、永正13(1516)年8月24日の条に次の記事があります。

「二十四日 癸酉、常陸小田政治ノ代官菅谷勝貞、若泉五郎左衛門ヲ同国土浦城ニ攻メテ之ヲ切ル、是日足利高基之ヲ褒ス」

これが事件の要綱で、永正13年8月24日に菅谷勝貞が土浦城を占領し、高基がこれに感状を与えた、と読めます。高基は永正9年から古河公方です。しかし、私は小田氏家臣の菅谷氏が小さな土浦城を占領した位で、公方が感状を出すだろうか、と疑問を感じました。根拠とされる史料を見てみましょう。

資料①はこの時の感状の写で、氏治は政治の写し違いです。「馳せ参じ」とあるから、高基の居所に行っただけでしょう。当時高基は父政氏と争い、政治は高基側でした。勝貞は主君である政治の代わりに高基の下に向き、大いに働いたのでしょう。感状はその結果出されたものと見てよいでしょう。

資料②の「菅谷伝記」は江戸時代に成立した戦記物で、史書というよりは伝承や文学に近く、内容には厳格な検討を要しますが、ここには土浦城占領のことはありません。資料③④は小田氏の系譜です。これは江戸後期の考証学者宮本元球（号茶村）の著作『常陸志料』の中に含まれています。「小田氏譜」には高基側について活躍した事と土浦城攻略が併記され、「諸族譜」には土浦城攻略の事だけです。なお、「寛永諸家系図伝」に載る菅谷氏の系譜が最古の資料と思われませんが、それには土浦城占領の記事はあっても、年月日はありません。

『大日本史料』や系譜の二史料は、土浦城落城をこの「書上古文書」の日付に合わせたのではないのでしょうか。とすれば要綱の書き方は、相撲で言う「勇み足」でしょう。土浦落城の正確な年月日は不明というのがよさそうです。

(市史編さん係非常勤職員 雨谷昭)

資料① 「書上古文書」七 菅谷撰津守勝貞  
貞拝領、菅谷紀八郎政和書上  
為二氏治代官一馳参、抽ニ粉骨一走廻候  
条、神妙之至二候、於ニ向後一別而可レ有ニ  
御懇切一候也、被レ下ニ御自筆一  
永正十三年 八月廿四日 高基判  
菅谷撰津守殿 謹言

資料④ 「諸族譜」下信太氏  
範宗（中略）菅谷隠岐守亦我同族、其  
子有ニ勝貞一、与ニ土浦城主若泉五郎左  
衛門一連年戦争、永正十三年八月、遂ニ  
攻レ城陥レ之

資料③ 「小田氏譜」  
（前略）永正十三年八月、遣ニ菅谷勝貞一  
撃ニ足利政氏兵一敗レ之、先レ是足利政  
氏与ニ其子高基一不レ善、（中略）政治助ニ  
高基一、是月勝貞又攻ニ土浦城一、殺ニ城  
主若泉五郎左衛門一致ニ其城一政治一、政  
治置ニ信太治部少輔一守レ之

資料② 「菅谷伝記」  
（前略）爰に古河の屋形より援兵を乞  
ふに依て、政治止事を得ず出張し、援  
兵を出し、佐竹とも合戦におよぶ事数  
度也、然るに永正十三壬子年、菅谷撰  
津守勝貞を援兵として指出す、勝貞士  
卒を励、粉骨を尽し相戦故、大利を得  
条、公方高基より感状を賜



# 地域と博物館

## 博物館の運営（3）

当館は、土浦藩土屋家の居城であった土浦城跡に隣接しています。土浦城跡は本丸と二の丸の一部が茨城県指定史跡となっており、本丸の櫓門が現存しています。本丸土塁上に復元された東櫓は、当館の付属展示施設として内部を公開しています。当館は、歴史を重ねてきた土浦城跡と周辺地域に根ざした地域博物館です。

今回は、この地域博物館としてふさわしい博物館運営について考えてみたいと思います。

地域博物館は、地域に関わる資料（当館の場合は歴史・民俗資料）を収集し蓄積する施設で、これらの資料は地域社会を豊かにする貴重な資源です。博物館に蓄積された資料は、その調査研究の成果を展示公開することで活用が図られます。展覧会の開催にあたり、当館は、地域に関わりの深いテーマにこだわってきました。資源である資料を活用し、地域の活性化を促す拠点としての役割が博物館にあり、博物館運営の方向性の一点はここにあるといえるでしょう。

当館では、平成 19（2007）年のリニューアルオープン後の新たな目標のひとつに、地方自治体の一機関として、地域史研究の成果をまちづくりへの提言や協力につなげていくことを掲げています（「土浦市立博物館の展示改装と新しい取組み」『土浦市立博物館紀要』第 18 号 2008 年）。

歴史的、文化的資源は、その地域の文化度の指標とも言えるものであり、地域の特性として発信する価値があります。現在、その土地を代表する特産品や工芸品などを「地域ブランド」と称して人気を呼んでいます。博物館が地域の伝統技術や行事などを資料に基づき検証することで、地域の特性とその稀少性を有効に活用できると考えます。

農家の「木綿織」や霞ヶ浦の「帆引き漁」の伝統技術、「郁文館の正門」や「土浦幼稚園の幼児教育」、「旧茨城県立土浦中学校本館」などに通底する教育文化、「からかさ万灯」の仕掛け花火や「土浦全国花火競技大会」にみられる伝統行事など、当館はこれまでこれらをテーマとして展覧会を開催してきました。いずれも 100 年を超える歴史と伝統が蓄積された資料です。先人が創出した文化に由来する地域の特性、つまり「地域ブランド」を提言する意図を開催のねらいに込めてきました。

地域博物館の運営において留意すべきことは、博物館に対する市民の信頼と関心にあります。市民の信頼と関心を高めるためにも、資料という名の埋もれた資源を掘り起こす作業が今後よりいっそう重要になってくることでしょう。

（塩谷修）



現存する旧制土浦中学校本館

[明治 37（1904）年竣工・国指定重要文化財]



土浦幼稚園に伝わる明治期の教材

[土浦小学校附属幼稚園は明治 18（1885）年に開園]

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。

今号は、秋の恒例行事となった<sup>ていぢや</sup>呈茶に協力いただいている茨城県立土浦第二高等学校茶道部の顧問 塚原久子先生に寄稿していただきました。

## 「若き茶人に期すること」

平成 19 (2007) 年より、土浦二高の茶道部は博物館展示ホールにおいて呈茶を行っています。例年好評で、多くのお客様を迎え菓子と一服の茶でもてなしをさせていただいております。博物館の展示テーマに合わせた趣向で席をもうけ、さほど堅苦しくない立礼<sup>りゅうれい</sup>の席は、茶道部の生徒の貴重な実践の場ともなっています。高校入学を機に茶道を始めた初心者ばかりですが、外部指導者である裏千家教授の先生の丁寧なご指導のもと日々研鑽を重ね、一年も過ぎれば立ち居振る舞いにも茶人としての雰囲気<sup>けいふき</sup>が身につくようになります。私も個人的に茶道の稽古に励む者ですが、高校生がきびきびとした所作<sup>しよさく</sup>で稽古をする姿はさわやかで、若い人ならではの美しさを感じます。茶道人口が減少している昨今ですが毎年何人もの新入生が入部し、旧制女学校の伝統と格式を受け継いでいます。



さて、恒例となった呈茶の今年のテーマは「水に想いをよせて」。水都土浦をしのぶ素敵なテーマです。水運で栄えた土浦の藩主土屋家は、大名茶人として名を馳せたと聞いております。博物館のご尽力で、散逸した茶道具が里帰りをしていますが、そうした逸品を間近に鑑賞できるのも博物館探訪の楽しみの一つではないでしょうか。茶の湯とのゆかりの深い施設で、若き茶人が日頃の稽古の成果を市民の皆様に披露し、それが茶の文化に少しでも親しみを持っていただく機会になりましたら、これ以上のことはありません。

(茨城県立土浦第二高等学校教諭 塚原久子)

### コラム (44) 3年目を迎えた「戦争体験のお話をきく会」

今年はどうなにかお願いできるだろうかと、やや不安な気持ちで計画したお話会。幸いにも数年来の聞き取り調査への協力者である森玲子さんと栗栖恵子さんのご快諾を得、平成 30 年 8 月 11 日、「戦争体験のお話をきく会」を開催することができました。

お二人は、東京から土浦へ疎開した、当時 10 歳と 14 歳の少女でした。森さんには「土浦での学童疎開の体験について」、栗栖さんには「土浦での疎開生活と勤労働員について」と題してお話いただきました。「大変だったということ以上に、平和と自由が奪われない努力が必要であることを知ってほしい」(森さん)、「今の日常生活が当たり前と思わずに、自分の意見を言ってほしい、声を出してほしい」(栗栖さん)と、戦時下の労苦にとどまらず、若い世代へのメッセージを力強い言葉で語ってくださいました。

「学校で習わないことを知ることができた」「体験した本人から聞けてよかった」という参加者の声。本人が目の前で語る強み、その強さをいかに文字や音声、映像で残し伝えるか。あらためて考える時間ともなりました。  
(野田礼子)

### 情報ライブラリー更新状況

【2018・10・2現在の登録数】

古写真 594点(+1)

絵葉書 506点(+1)

※( )内は2018年6月30日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞(かすみ)

2018年度

秋季展示室だより(通巻第44号)

編集・発行 土浦市立博物館

茨城県土浦市中央1-15-18

TEL 029-824-2928

FAX 029-824-9423

<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1~5ページのタイトルバック(背景)は、博物館2階庭園展示です。

2018年度秋季展示は、2018年10月2日(火)~12月27日(木)となります。「霞」2018年度冬季展示室だより(通巻第45号)は2019年1月5日(土)発行予定です。次回の来館もお待ちしております。

※展示室だより「霞」は、当館ホームページからもご覧になれます(カラー)。